

地域活性化における「主体性と個の確立」を重視した人材育成の方法論と効果に関する一考察 —宮城県気仙沼市若年人材育成塾「ぬま大学」の事例より—

一般社団法人 JA 共済総合研究所
調査研究部 研究員

おおともわかこ
大友和佳子

アブストラクト

本研究は、地域を活性化する上で若年層を活かすための人材育成の方法論と効果に考察を加えたものである。研究対象は宮城県気仙沼市の20代～30代の若年人材育成を目的とした「ぬま大学」である。結論は、支援方法としてはコーディネーターによる傾聴や受講生同士の対話を通して個人の主体性を発揮させていく手法が観察された。また、そうした個人の主体性を発揮させるためには、地域の人的ネットワークによる支援体制が重要であることがわかった。こうした方法を通し、受講生と地域には様々な効果が生じている。

(キーワード) 主体性 傾聴 人的ネットワークによる支援体制 個の確立 地域への効果

目次

- | | |
|------------------------|-----------------------|
| 1. はじめに | 6. 研究結果 |
| 2. 先行研究—地域活性化と人材育成の方法論 | 7. 考察と結論—地域活性化への視点の提言 |
| 3. 研究目的と方法 | 8. 本研究における今後の課題 |
| 4. 宮城県気仙沼市概要 | 9. おわりに |
| 5. 若年人材育成塾としての「ぬま大学」 | |
-

1. はじめに

2017年に、京都大学と日立製作所が、日本の2052年までの将来シナリオを「都市集中シナリオ」と「地方分散シナリオ」の2つに分けて研究報告した¹。「都市集中シナリオ」は、「主に都市の企業が主導する技術革新によって、人口の都市への一極集中が進行し、地方は衰退する。出生率の低下と格差の拡大がさらに進行し、個人の健康寿命や幸福感は低下する。」というもの。「地方分散シナリオ」は、「地方へ人口分散が起こり、出生率がもちなおし格差が縮小し、個人の健康寿命や幸福感も増大する」というものである。この分岐点が確定するのは、2017年から約10年後で、一度確定したのちには変わることはないことが示された^[1]。この研究結果からも、日本の持続性を考える上で地方分散型社会を成立させることは、非常に重要であると言える。では、地方分散型社会を加速させるために何ができるのか。一つの答えとして、地方への若年移住が積極的に起きること、若年層の力が地域活性化に反映されること、が考えられうる。そこで、本稿は、若年層の力を地域活性化に反映させる方法論について考えてみたい。

2. 先行研究－地域活性化と人材育成の方法論

現在の国内を見れば、若年移住が集中的に進んでいる地域が存在する。そうした地域に共通するのは、若年層の新しいチャレンジを

積極的に応援しようとしている点である²。

人口を増やすことも重要であるが既に暮らしている人材の強味や個性やアイデアが十分に発揮される地域を作ることが若年層を惹きつける魅力になる。それでは、個人に強味や個性を発揮させチャレンジを促す支援にはどのようなものがあるか。

河井^[3]は、地域の担い手を創造するためには、地域に真剣にかかわりあおうとする地域参画総量こそが重要であるという主張をしている。さらに、古市・ブストス^[4]が、地域の人々が社会参加するように育成することに難しさがあることを指摘した上で、いくつかの人材育成の段階を準備すること、段階に応じた参画のしくみを提示することを提案している。ここでは、地域における住民の積極的な地域参画を促すには、段階に応じた多様な人材育成のしくみが必要であるということが指摘されている。アーンスタイン^[5]が示した「住民参加のはしご」によると、住民参加には、1. 操り参加（趣旨や役割の不明確な操られた参加）、2. セラピー（お飾り住民参加／利用された参加）、3. お知らせ（形式的住民参加／限定参加）4. 意見聴取（与えられた役割の内容を認識した上での参加）、5. 懐柔（行政主導で住民の意思決定のある参加）、6. パートナリシップ（住民と行政の協働・決定権の共有）、7. 委任されたパワー（住民主体の活動）、8. 住民によるコントロール（住民主体の活動に行政を巻き込む）があり、6以降が住民の権利とし

1 プレスリリースについては、<https://www.hitachi.co.jp/New/cnews/month/2017/09/05.html>

2 こうした動きについては、大友（2021）の「地域における「若年移住者」の新しい取り組みと支援に関する研究－地域起業（ローカルベンチャー）と中間支援組織の視点から－」に詳しい報告をまとめている^[2]。

での参加（住民の力が生かされる住民参加）とある³。

この段階論から言えることは、すなわち人材育成を目指すゴールは主体的に地域に参画する人材を育てることだと言える。ここで言う「主体性」とは、「周囲の意見や指示に頼らず、自分自身の考えを軸として問題に取り組む性質」を意味する。

しかし、先行研究では、地域活性化において住民の主体性を引き出す方法論に関しての具体的な提示が少ない。そこで、本稿では地域活性化における住民の主体的な参加を促す方法論に接近したい。研究対象としては、「人から始まる地方創生」を掲げている宮城県気仙沼市⁴とした。

3. 研究目的と方法

本研究は、宮城県気仙沼市における若年層の人材育成塾である「ぬま大学」の支援方法を考察し、次の3点を明らかにすることを目的とした。

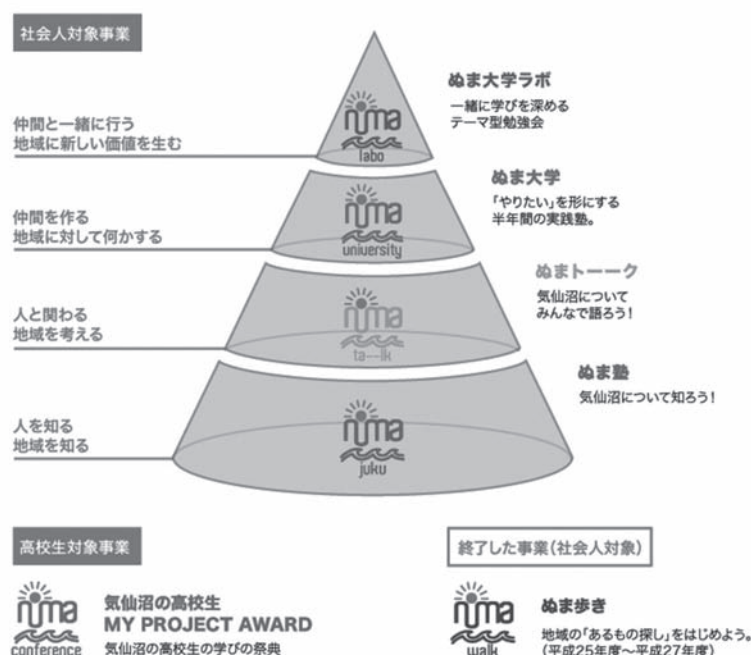
第一に、若年人材の主体性を引き出すための支援方法について考察する。

第二に、主体性を引き出す支援が、受講生に与えている効果について考察する。

第三に、受講生の変化が地域活性化に与えている効果について考察する。

調査は、2021年12月から2022年12月にかけて、第6期と第7期の卒業生24名⁵に関するアンケートと、第1期から第8期にかけての

（図1）気仙沼市における担い手育成支援事業



（出所）気仙沼市役所

3 日本語訳については、世古一穂（2001）『協働のデザインーパートナーシップを拓く仕組みづくり、人づくり』学芸出版社 P.40

4 気仙沼市における人材育成のしくみについては、共済総研レポートNo.181に詳しく説明している^[6]。

5 第6期と第7期における卒業生の実数は27名であるが、アンケートの回収人数が24名のため、24名と記した。

卒業生15名に対しての半構造化インタビューを実施した。インタビュー対象者は、第1期から第8期までのバランス、男女比などに考慮して事務局から推薦をいただいた。

4. 宮城県気仙沼市概要

宮城県気仙沼市は、三陸リアス海岸の中心に位置し、メカジキやカツオの水揚げ量は日本一を誇り、市の製造業出荷額の大半を水産加工品が占める。宮城県気仙沼市の状況が大きく変わったのが2011年の東日本大震災で、死者・行方不明者は1,200人以上、住宅約1万6千棟が被災し、人口は7万4千人から6万5千人へと急減した。こうした悪状況からの復興で「人から始まる地方創生」という市政の方針が掲げられ、「市民一人一人がまちを創る」ことが復興の要として重視された。そして、この方針における人材育成のしくみとして2016年に「気仙沼まち大学構想」が提示された。

「気仙沼まち大学構想」とは、気仙沼市全体を大学と見立て、学び・対話・協働・共創を通して市民が主役のまちづくりを目指すものである。この構想の実現に向けて様々な人材育成プログラムが展開されている（図1）。

本稿では、こうした多様な人材育成事業のうち、特に20代～30代の若年層向けの塾である「ぬま大学」を取り上げ、その方法論、個人と地域への効果等を多面的に考察する。

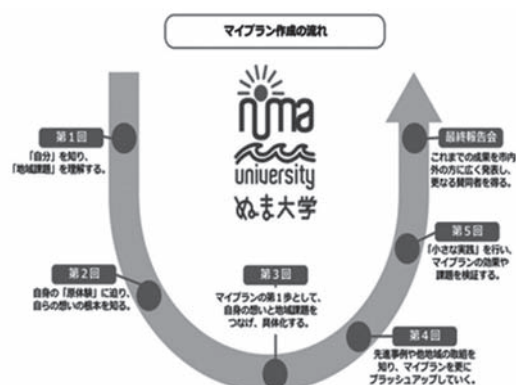
5. 若年人材育成塾としての「ぬま大学」

本稿で対象とする「ぬま大学」は、2015年に気仙沼市の担い手育成支援事業（地域づくり推進課が主催）の一つとして誕生した20代

～30代の若年層向けの塾である。2022年現在、第8期であり、第7期までの延べの卒業人数は93名である。目的は、若年層の同世代や地域づくりの実践者との交流を通じた参画機会づくりで、「気仙沼市震災復興計画事業NO.193」には、次のように記されている。

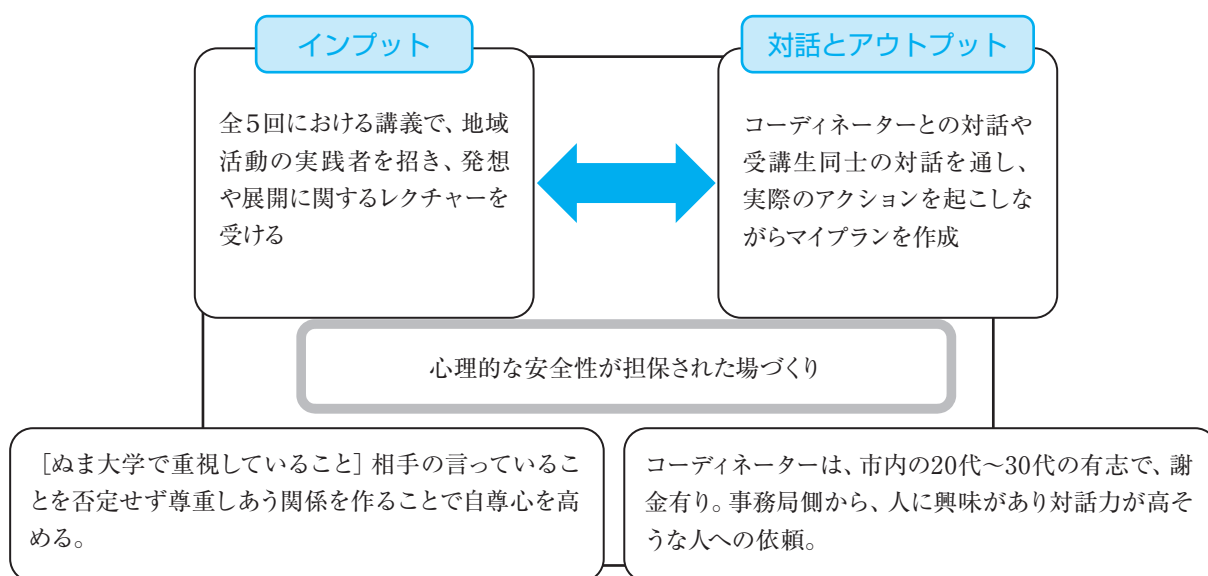
「震災前には、まちづくりに参加、参画の少なかった若い世代が、震災を契機としてまちづくりに関わる事例が増えている。このことから、こうした意欲ある若い世代が交流、議論する機会をつくるとともに、具体的な実践活動のサポートを通じてまちづくりの担い手育成を行う。」運営主体は、合同会社 colereで、対象は、「地域で何かをやりたけれど、どのように始めたらよいか」と悩む20代～30代の若い層が主である。プログラムの期間は約半年で、5回の講義プログラムと、一人に一人の伴走者がつき日常的に対話を行う中でマイプランを作成する（図2）。ぬま大学の特色は、一人一人にコーディネーターと称する伴走者がつくことで、一方的に講義を聴くだけではなく、自分が感じている地域への想いや何をやりたいのかといった内面的な声を傾聴してもらえらる機会を持つこと

（図2）半年間のスケジュール



（出所）気仙沼市

(図3) 支援方法



(出所) 筆者作成

ができる。コーディネーターは、市内の20代～30代の有志で事務局側からの依頼がある。

ぬま大学の支援で特に重視されているのは、受講生が「心理的安全性」を感じながら自分の感じていることや悩みを本音で話すことができる場づくりである(図3)。こうした対話の場づくりは、受講生一人一人に対してコーディネーターがつき「徹底的に傾聴する」ことで可能としている⁶。

さらに、インプットとしては月に1回のペースで地域活動で活躍している実践者の講義がある。こうしたインプットとアウトプットを通して、最後は自分の地域におけるアクションプランであるマイプランを完成させ、最終報告会で市長や県内外のアドバイザー、市民など総勢100名ほどが集まる場で発表をする。

こうしたしくみの中で、個人が獲得するス

キルとして期待されているのは

1. 自分との対話によって自分を知ること、自分らしさを深めること、主体性を高めること
 2. 自己理解を深めることによって、他者理解や他者との関係を作れるようになること
 3. 以上のスキルを通して、地域で具体的なアクションを起こすこと、
- の3段階である。

このような3段階については、ピーター・センゲの『21世紀の教育』^[7]における理論が参考になる。

ピーター・センゲは、現代社会を「注意を逸らすものであふれ、人と人の関わりに危機をもたらすペースの早い時代」「人間とモノと地球という惑星の相互関係がかつてないほど重要になった世界である。」と定義した上で、こうした時代の中で重要となる能力は、

6 コーディネーターと受講生の対話は全5回の講義内だけではなく、講義の間にも頻繁に実施されている。

1. 私たち自身へのフォーカス（自分にとっての目的を感じることや、深いところにある意欲につながることで、そして、自分が感じることが、なぜそのように感じるのかを理解したり、またその感覚にどう対処すればよいかを知ることである。自分自身にフォーカスできることは、目的を持って生きることや、目の前にあることに集中すること、気を散らせるものから距離を置いたり、自分のやっかいな感情と付き合っていくためのキーポイントになる）

2. 他者へのフォーカス（他者に気づき理解すること。自分の見方からだけではなく、相手から見えている景色からその人のリアリティが理解できて、そこから自分と相手に関わっていく。このようなスキルは誰かを思いやり、他の人と協働する力になる。お互いに効果的な関係を作っていくためのキーとなる力になる）

3. 外の世界へのフォーカス（世界を理解するということは、システムがどう相互作用し、そこでどのように相互依存する関係性をつくりだしているのかに気づくということである）

と、自分を知ること、他者への理解、社会への参画という3段階で整理している。

筆者は、ぬま大学で実践している人材育成の3段階はこの3段階と類似したものとして理解できると考えた。そこで、受講生への効果を測るアンケートは、以上のピーター・センゲの理論を引用し3段階がどれだけ達成されたのか、という視点で評価した。

それでは、次に研究結果を示したい。

6. 研究結果

（1）アンケート結果

ぬま大学の受講生、第6期（2020年）・第7期（2021年）の計27名に対し、受講前と受講後の変化を明らかにするためにアンケート調査を実施した。第6期と第7期の受講生に限って実施した理由は、受講生の記憶の確かさを加味してのことである（内、回答人数は24名である）。

1) 受講生の出身地

（表1）に受講生の出身地を示した。これによると10名が宮城県の出身者でその内4名が気仙沼市生まれである。

（表1）受講生の出身地

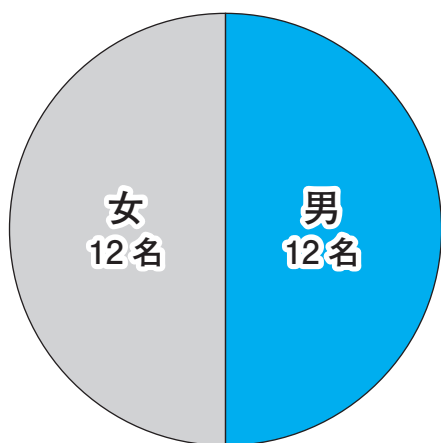
宮城県	10名（内4名が気仙沼市生まれ）
秋田県	1名
山形県	1名
福島県	1名
茨城県	1名
千葉県	3名
神奈川県	2名
東京都	1名
静岡県	1名
愛知県	1名
広島県	1名
大阪府	1名
計	24名

（出所）筆者作成

2) 受講生の性別

受講生の性別は、女性12名、男性12名である（図4）。

(図4) 受講生の性別

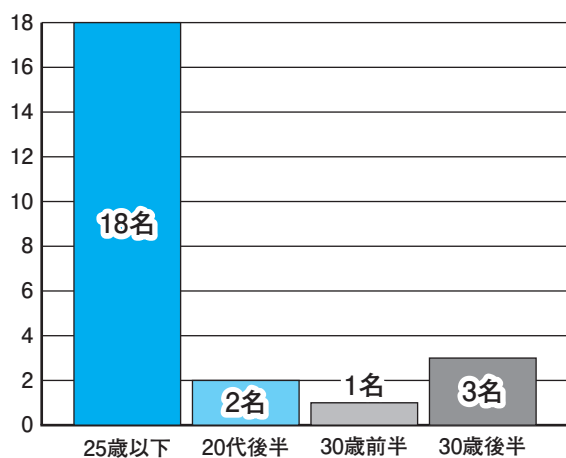


(出所) 筆者作成

3) 受講時の年齢

受講生の受講時の年齢は25歳以下が18名と最も多く、次いで30代後半が3名、20代後半2名、30代前半が1名である(図5)。

(図5) 受講時の年齢

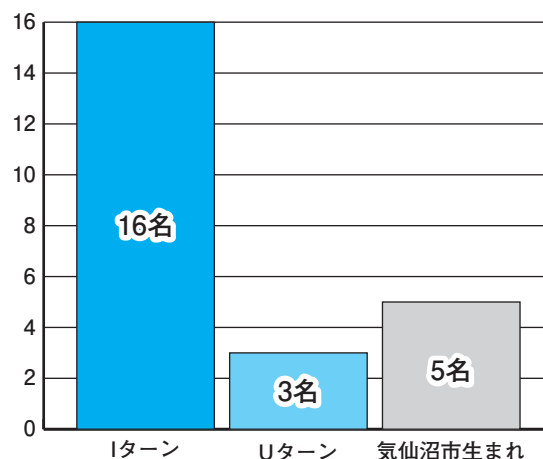


(出所) 筆者作成

4) I・Uターン率

I・Uターン率を(図6)に示した。Iターンは16名、Uターンは3名、気仙沼市生まれで一度も地域外への移動がないものは5名である。受講生におけるI・Uターン率は7割を超えており高い割合である。

(図6) I・Uターン率

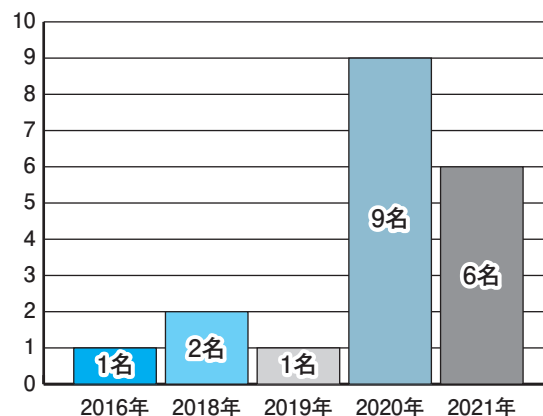


(出所) 筆者作成

5) I・Uターンの時期

次に、受講生のI・Uターンの時期を(図7)に示した。これによると、比較的受講時期に近い時期のI・Uターンが多い。受講生は、I・Uターンをしてすぐの段階でぬま大学を受講している。

(図7) I・Uターンの時期



(出所) 筆者作成

6) 卒業時のマイプランと実行状況

卒業時におけるマイプランと実行状況を(表2)に示した。

(表2) 第6期

	マイプラン名	マイプラン概要
1	やさしさあふれる笑顔のまち気仙沼をめざして	障害のある人が有事の際に、周囲の配慮や手助けをお願いしやすくする「ヘルプカード」を広めるマイプラン。幼少期に難病にかかった自身の経験から、必要な人がいざという時にちゃんと使えるようになること、その時に手を差し伸べられる人が増えることで、“笑顔が溢れるまち”になることを目指している。
2	オトノバ	音楽を通して自分自身について語り合う場「オトノバ」を行うマイプラン。人と“好き”を語る時間や、人と接する時に相手が「何を感じて、何を大切にしているか」を分析することが好きであることと、自身が音楽が持つ“人の気持ちに寄り添う力”に助けられてきた経験から、場づくりを行っている。
3	「自分のため」は「人のため」	自分のやりたいこと・好きなこと発進で、“人のためになること”を体現するマイプラン。具体的には2つ。①「小学生対象プログラミング教室」の開催。自身が持つプログラミングのスキルを活かして何かしたいという思いから始まった。②まちの中で誰でも自由に本が読める「みんなの本棚」の設置。自身が本が好きであることと、ものづくりをしてみたいという思いから始まった。
4	シングル・しんどいママとその子ども達へ送る 秘密じゃない「秘密基地」	悩みやつらさを持ったママが“しんどい”を話せる場（シェルター）作りを行うマイプラン。シングルマザーである自身が、育児の大変さを身をもって経験していることから、シングルマザーの拠り所を作りたいという思いがある。“育児”を、ママだけのものではなく、みんなで守り、育てる気仙沼を目指している。
5	気仙沼を前向きにとらえられるようになるには？	子ども達と地域の大人をつなげるマイプラン。子ども達に気仙沼の魅力＝まちのために活躍する大人を知ってもらうことで、気仙沼に住む喜びと安心感を感じてもらいたいという思いがある。まずは自分が地域の大人と子どもと出会うことから始め、ゆくゆくは子どもと大人をつなげる機会を作りたいと考えている。
6	生きて描く場所	表現に触れられる場所「シェアアトリエ」を作るマイプラン。自身が絵を描くことが好きで絵に救われてきた経験から、大人から子どもまで、表現の楽しさを体験してもらうことができる拠点を作りたいと考えている。まずは個展を開いて仲間を集めることから始める予定。
7	気仙沼なう	震災当時に気仙沼に関わった人が“今の気仙沼”を知ることができるフェスを開催するマイプラン。震災当時に関わった人と気仙沼の人との「再会の場」を通して、気仙沼とつながり続ける仕組みを作り、気仙沼ファンを増やしたいと考えている。

(第6期) (つづき)

	マイプラン名	マイプラン概要
8	自分を大切にするための表現	自分を大切にできる表現ツール＝動画を制作するマイプラン。HSPである自身の特性を活かしながら、市内の動画制作コミュニティに所属し、気仙沼を自分らしく表現した動画を制作している。自身が表現活動を通して、自分を大切に生きていくことができる人が増えることを願っている。
9	価値観を壊す「旅」	日本一周の旅をするマイプラン。気仙沼で1年間過ごす中で、自分のやりたいことにチャレンジしている大人と出会い、自分も、以前からやりたいと思っていた「日本一周の旅」を今やろうと思い、挑戦している。
10	平和のすすめ	日常の中で「隣の人を幸せにすること」に取り組むマイプラン。一人一人が隣にいる人・思いを寄せる人を幸せにすることが「世界平和」につながると考え、それに向けて継続的にみんなで取り組めることを行っていきたいと考えている。
11	ママうきうき化計画	ママを対象に「聴き合う場」「小さくやってみる会」を開催するマイプラン。ゆっくり自分の気持ちを話し聴き合う「聴き合う場」を開催すること、ママが持っている埋もれたスキルを活かしてイベントをやってみる「小さくやってみる会」を通して、ママがうきうき生活するまちを目指している。
12	座布団父さん交流記～子育てをより楽しむために～	パパ同士のコミュニケーション活動（交流記）を行うマイプラン。自身の子育ての経験が他のパパに活かされた経験から、パパ同士で交流し、子育てについて相談し合えるパパ友コミュニティ作りを目指している。ママが主流の子育てにパパの参画が増え、家族で子育てを楽しめるようになってほしいと思っている。
13	一人一人がその人らしく生きられる未来	その人らしく生きられる未来を目指し、ありのままの感情を日常的に自由に表現し合えるコミュニティ作りを行うマイプラン。コミュニティを通して自分の感じ方・考え方を大切にできる人が増えることで、“その人らしく生きる”という価値観が広がっていくことを目指している。
14	ブレイクダンスを通してチャレンジを楽しめるまちへ！ ～気仙沼の子供たちに新しい世界を～	子どもを対象にブレイクダンスに触れられる機会作りを行うマイプラン（ダンススクールの開講や、ダンス大会の開催）。吃音を持つ自身がダンスを通して自信を持ち、気仙沼でチャレンジを楽しめるようになった経験から、子ども達にも“チャレンジを楽しむ感覚”を届けたいと思っている。

(第7期)

	マイプラン名	マイプラン概要
1	ボードゲームCAFE	自分が好きな“ボードゲーム”を使ったイベントを通し、その人らしくいられる機会をつくるマイプラン。自身が、Uターン前にセミナーやイベントに積極的に参加していた経験から、気仙沼でも楽しく交流しながらも、発見や学びとなること、そして、一歩踏み出せるきっかけとなるような企画を行いたいと考えている。
2	自分と地域を重ね、考える、気仙沼98年生まれのきっかけづくり	自身と同じ世代が集う「98年会」を行うマイプラン。Uターン後、同級生のまちに対するネガティブな印象が強いことに気づき「気仙沼たのしっちゃを一人一人が実感できる街」を目指したいと考えた。ご飯会などを行い、同世代が周りに少ない人が気軽に話せる場や、気仙沼の楽しさを知ってもらう機会提供など、ハブとして機能したいと考えている。
3	ーおいしいおはなしめしあがれー おはなしレシピでちょっとした豊かさを	本に登場する料理やお菓子を自らレシピとして再現し、活用するマイプラン。イベント等で実際に料理の提供や子ども向けに料理教室を行う。自身が子どもの頃、好きな絵本に登場する料理を家族と作るのが幸せであった原体験から、料理と本を読むことを通し、あたたかなコミュニケーションを生み、ちょっとした幸せと楽しさをつくりたいと考案した。
4	ひとみの窓口～女性のモヤモヤを吐き出そう～	女性が一人で悩まないよう、自分が話しやすい窓口となるマイプラン。市内のカフェスペースなどで、紹介や予約があった際に気軽に話せる機会をつくりたいと考えている。自身が子育てやパートナーとの関係で悩んだ時に、行政の相談窓口を訪れ、“ただ話す”だけでも心が軽くなったという経験から考案した。
5	私をみて！～砂浜を支える海浜植物～	海浜植物を知ってもらうマイプラン。展示やポストカードの作成、海浜植物のお茶の提供に取り組む。海浜植物の美しさだけでなく、海浜植物がもたらす生態系や環境への良い影響も知ってもらえるきっかけをつくりたいと考えている。自身が大学で景観生態学を専攻する中で、海浜植物に心を奪われたが、その存在に気づかずにいる人が多いことから本プランを考案した。
6	GATE WAY CAFE ～観光客と地元民をくつなぐ>ほっとな空間～	観光客に気仙沼の魅力を「カフェ」という場を通して伝えるマイプラン。観光客が地元の生の情報を得づらいのではと感じ、立ち寄りやすく、自身の好きな自然と会話が生まれる「カフェ」に着目した。同期の皆川さん、佐々さんとチーム「KATARO-U」を立ち上げ、実践を重ねている。
7	ローウエイストで遊ぶまち	「楽しみながらローウエイストに暮らす人を増やす」マイプラン。いきなりゴミをゼロにすること（ゼロ・ウェイスト）は難しいため、できる範囲でゴミを減らすこと（ロー・ウェイスト）を目指し、「生ごみ処理機キエーロづくりワークショップ」を実施。自身が気仙沼で出来ることを探していた際、「気仙沼 勝手に環境庁」というサークルに参加したことをきっかけに考案。

(第7期) (つづき)

	マイプラン名	マイプラン概要
8	顔の見える街、気仙沼へ～気仙沼の「人」と「想い」をチカクする～	気仙沼市内外の人がもっと気仙沼に関われる機会、気仙沼に住む人の顔や魅力が見えるようにするマイプラン。自身の好きな写真や、仕事で携わっているワーキングホリデー事業を通し、実践していきたいと考えている。自身にとって、気仙沼が第二の故郷と思える・会いたいと思える人がいる場であることから考案。
9	わたしができる恩返し～食でつながるみまもりの輪～	近隣地区に多い高齢者の方と、見守り合うご近所づきあいをするマイプラン。程よい距離感で人付き合いができる「食卓を囲む」ことや、自身が好きな食の「おすそ分け定期便」や「軒先マルシェ」を通し、日常的で自然なコミュニケーションを生みたいと考えている。自身の祖母が孤独死した経験より考案した。
10	I Tを身近に	I Tを気仙沼で身近にするマイプラン。まずはI Tを身近に感じてもらうため、自身のスキルを生かし、周囲の人の小さな困りごとを解決することから始めたいと考えている。震災時、インターネットを通じ避難所にいる友達とコミュニケーションできたという原体験から、I Tを気仙沼・南三陸で活用し復興に貢献したいと思っている。
11	飛んでいきます！移動型コミュニティカフェ KATARO-U	お茶を通してコミュニケーションを楽しむ、拠点を持たない移動型カフェ「KATARO-U」を行うマイプラン。何かやってみたいと思っている人たちが、お茶を飲みながら語り、知り合うことでコラボレーションが生まれるきっかけとなる“円滑剤”のような場を目指す。自身がお茶屋の息子であることから、大学時代よりお茶を活用した移動型カフェを実践しており、気仙沼でも仲間を見つけ新たに活動を始めた。
12	Selamat Datang di Kesennuma	「日本一、(インドネシア) 技能実習生がいきいきと暮らす街」を目指すマイプラン。気仙沼の暮らしを知ることができるガイドブックのような1ヶ月の日めくりカレンダーを作成。それを、技能実習生が気仙沼に来る前にプレゼントしたいと考えている。自身が勤務する会社のインドネシア技能実習生と話す中で、気仙沼に来る前、気仙沼の情報を集めづらく不安を抱えている現状を知り考案した。
13	みんなで気仙沼楽しみたい！？ wow wow \ (^ o ^) /	「気仙沼を“楽しい”と捉え直せる」きっかけ作りを行うマイプラン。気仙沼の様々なアクティビティを周囲の人を誘い一緒に体験したり、自らが楽しむ姿を「#ぬま充」としSNSで発信する。地元の人々の「気仙沼は何もなくてつまらない」という声を耳にする一方で、気仙沼を楽しむ移住者が多いと感じたことをきっかけに考案した。

実行状況については、各自濃淡はあるものの、イベント等の企画・参画、各種情報の発信等、何らかの活動につながっている。

7) 受講前の状況

受講前の状況について以下の1から7の選択肢について複数回答可で回答していただいた。その結果が図8である。

受講前の状況としては、「こんなことをやりたいという何となくの想いはあるが行動に移せずにいた」が13名で最も多く、次いで「自分が何をやりたいのかがはっきりせず、自己の確立ができていなかった」が10名。次いで、「自分のビジョンがはっきりせず受身だった」が5名、「自分の使命・生きる目的などを知りたいと思っていた」が5名、「生活が職場と家の往復で人間関係が広がらなかった」が5名である。

(選択肢)

1. 自分が何がやりたいのかがはっきりせず、自己の確立ができていなかった
2. 生活が職場と家の往復。人間関係が広がらなかった
3. 自分の使命、生きる目的などを知りたいと思っていた
4. 自分のビジョンがはっきりせず、受け身だった
5. 自分なりの目標が明確で、共に夢を目指す仲間もいて充実していた
6. 「こんなことをやりたい」という何となくの想いはあるが、行動に移せずにいた
7. 自分で考えて自分で動くことが得意だった

8) 受講の動機

次に、受講の動機について図9に示した(単一回答)。

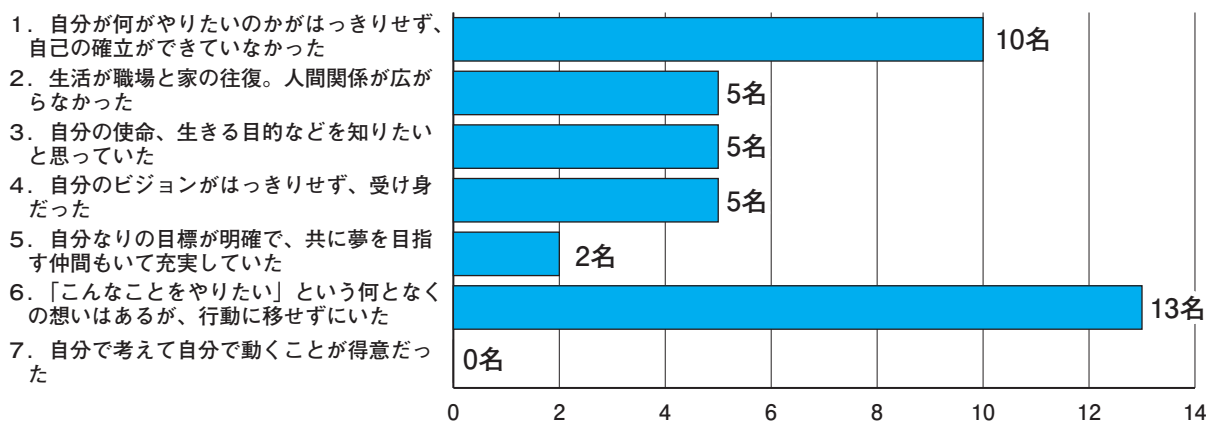
受講の動機としては、「やりたいことを探すため、ビジョンを明確にするため」が10名で最も多い。次が「仲間づくりのため」が7名。「地域に関わりたいが、どう関わればいいのかわからず関わりのきっかけがつかみなかった」が3名である。

9) 受講後の変化

次に受講後の変化として、自分自身を知るという意味での自己対話の習慣をどの程度習得したのか、という点についての調査結果を(図10)に示した(単一回答)。

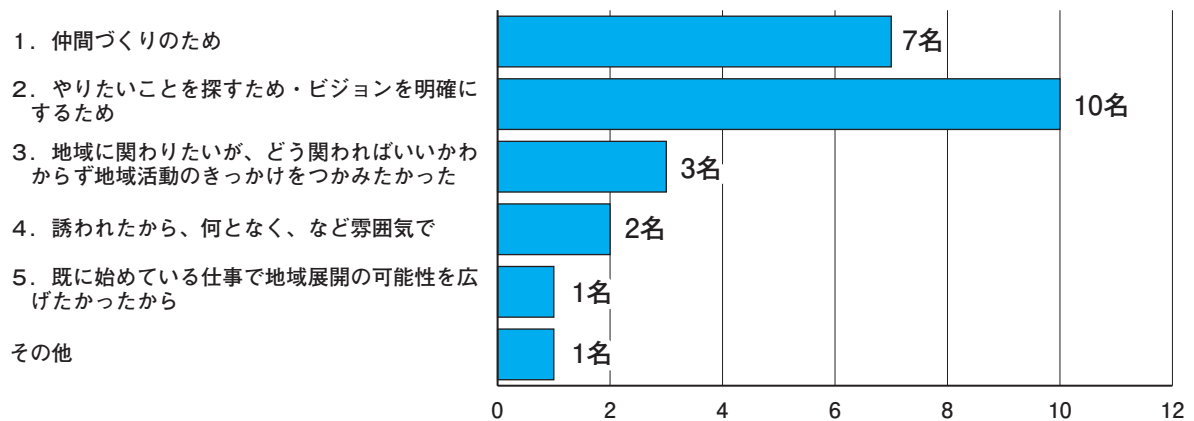
自己との対話の習得状況としては、「自分の希望、理想や感情を明確にした上で、それを基準に行動している」が12名で最も多い。次いで、「自分との対話を意識的にしている」が6名、「自分を知ることの大切さはわかったが、まだ自分の日常にしっかりと落とし込めていない」が4名、「自分のもやもやは解消したが、継続したサポートを受けたいと思

(図8) 受講前の状況



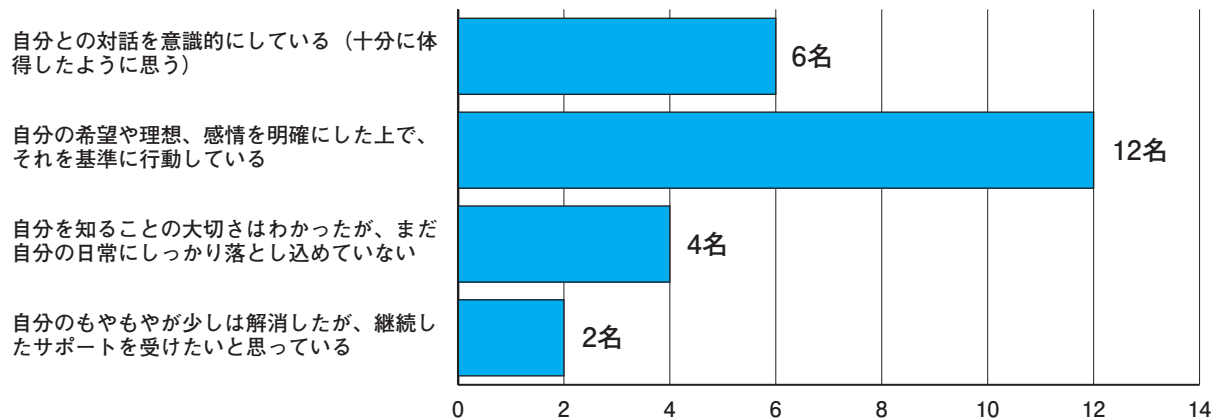
(出所) 筆者作成

(図9) 受講の動機



(出所) 筆者作成

(図10) 自己との対話の習得状況



(出所) 筆者作成

っている」が2名である。全体のおよそ7割が自己との対話を自分の日常の習慣とするようになったと回答している。

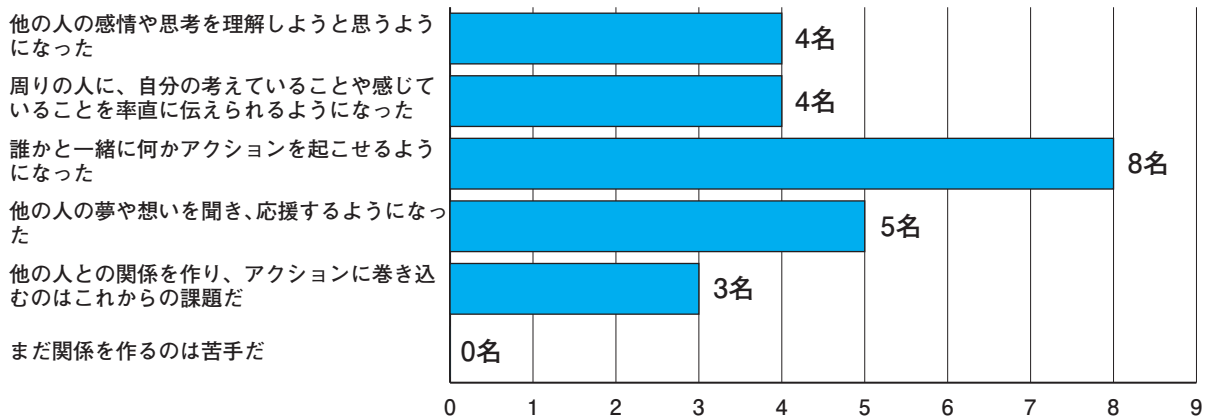
10) 他者への理解や関係づくり

次に他者への理解や関係づくりについての習得状況について、図11に示した(単一回答)。

最も多いのが、「誰かと一緒に何かアクションを起こせるようになった」が8名である。次いで、「他人の夢や想いを聞き応援するようになった」が5名、「周りの人に自分

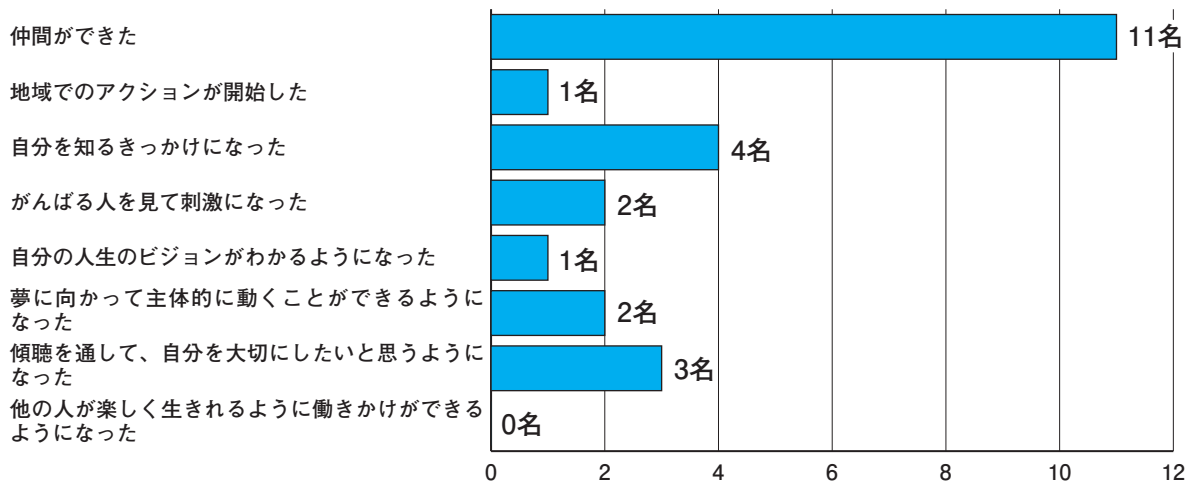
の考えていることや感じていることを伝えるようになった」「他人の感情や思考を理解しようと思うようになった」が、それぞれに4名ずつである。他人との関係を作りアクションに巻き込むのはこれからの課題だ」が3名であり、おおよそ7割が他者理解や関係づくりへの考え方や感じ方、行動の変化を感じている。

(図11) 他者理解や関係



(出所) 筆者作成

(図12) んま大学で一番役に立ったこと



(出所) 筆者作成

11) んま大学で一番役に立ったこと

次に、んま大学での受講を通し一番役に立ったことについて（図12）に示した（単一回答）。

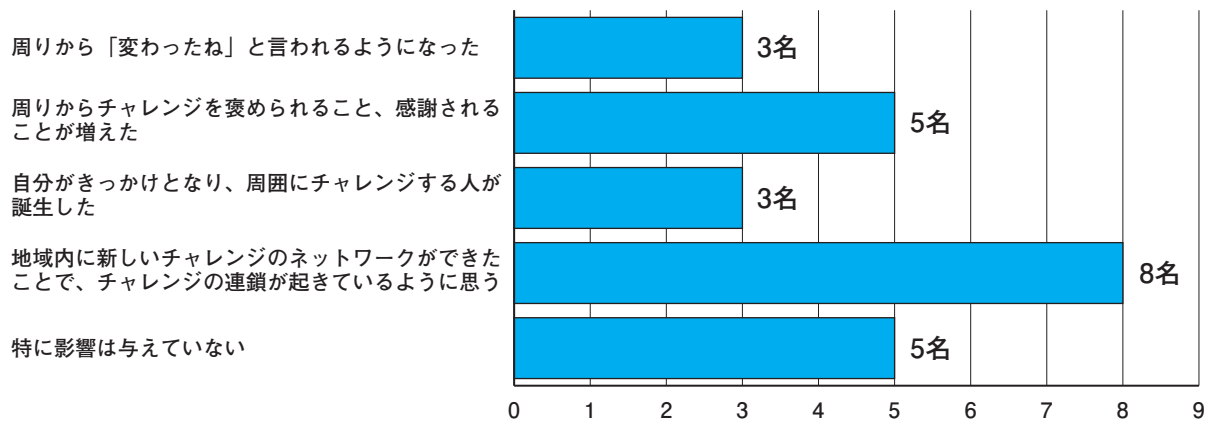
んま大学で一番役に立ったことについては、「仲間ができた」が11名、「自分を知るきっかけになった」が4名、「傾聴を通して、自分を大切にしたいと思うようになった」が3名であり、「仲間ができた」と回答しているものが最も多い。

12) 自分が変わったことでの周囲への影響

自分が変わったことでの周囲への影響について、（図13）に示した（単一回答）。

自分が変わったことでの周囲への影響については、「地域内に新しいチャレンジのネットワークができたことでチャレンジの連鎖が起きているように思う」が8名。「周りからチャレンジが褒められること、感謝されることが増えた」が5名、「特に影響は与えていない」が5名である。

(図13) 自分が変わったことでの周囲への影響



(出所) 筆者作成

(2) インタビュー結果

インタビューは、第1期から第8期までの15名に対して実施し、「最も評価できる支援内容」と「身についた力」について実施した。

① インタビュー対象者属性 (表3)

(表3) インタビュー対象者属性

	氏名	性別	受講時期	職業
1	S	男性	第2期	会社員
2	S	女性	第6期	協力隊員
3	S	女性	第3期	栄養教諭
4	K	男性	第4期	福祉施設
5	S	男性	第5期	中学校教師
6	S	女性	第7期	美容師
7	A	男性	第5期	観光
8	T	男性	第7期	会社員
9	I	女性	第6期	会社員
10	I	男性	第2期	自営
11	O	男性	第1期	僧侶
12	T	女性	第3期	保育士
13	Y	女性	第2期	主婦
14	S	男性	第5期	役場職員
15	K	男性	第8期	会社員

(出所) 筆者作成

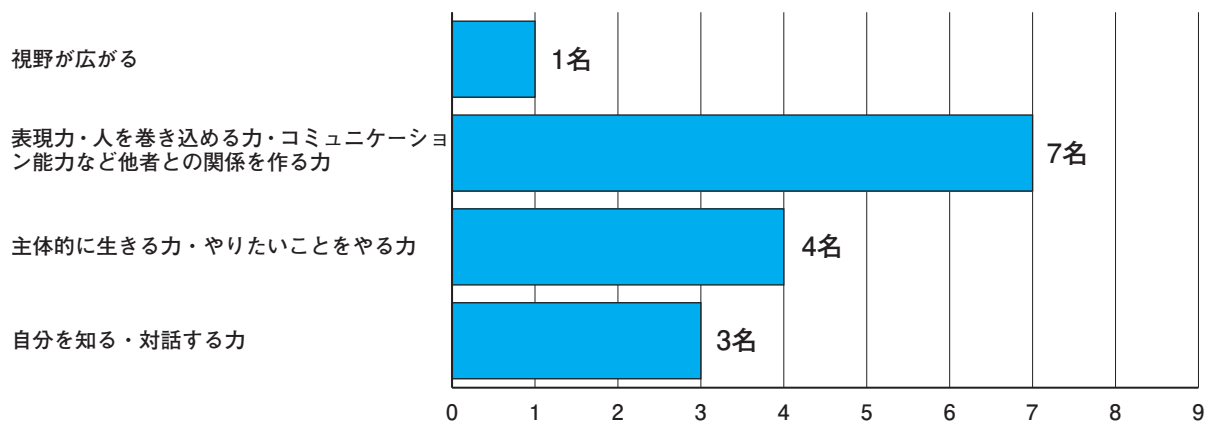
② 最も評価できる支援内容

「最も評価できる支援内容」については、全ての受講生が「コーディネーターによる傾聴」を挙げており、「社会に出てから自分の話をじっくり聴いてもらえる経験がなかった。」「今まで集団の中の一人という扱いしか受けたことがなかったが、初めて自分という個を大切にしてもらえ、自分という存在を大切にしたいと思えるようになった。」「少しでもやりたいと思っていることを否定されず、すべて肯定して受け止めてもらえると、やってみようという気持ちになる。」「きちんと話を聴いてもらえる経験を通して、自分も周りの人の話をきちんと受け止めようと思えるようになった。」などという回答が聞かれた。

こうした個人としての自分の声を傾聴によって受け止めてもらえた経験が、参加した後の変化としての、自分を知ることにつながっていると考えられる。

このように「ぬま大学」の中で、それぞれの想いに耳を傾け一人一人が大切にされ認められる対話の空間が創られている。事

(図14) 身についた力



(出所) 筆者作成

務局のねらいとしては、こうした互いが尊重し応援しあえる関係を街の中に増やしていくことにある。

③ 身についた力 (図14)

身についた力には、「表現力・人を巻き込める力・コミュニケーション能力など他者との関係を作る力」が7名と最も多く、次いで「主体的に生きる力・やりたいことをやる力」4名、「自分を知る・対話する力」3名と続いた。

7. 考察と結論—地域活性化への視点の提言

以上のことを総合的に考察すると、

(1) 主体性を引き出す支援方法

丁寧な傾聴や受講生同士の対話などを通して自己の内面に目を向けさせる手法、さらにはそうした中から出てきた願望や願いに対し

て、ネットワークを紹介したりマイプランを作成し発表することで実際のアクションを起こしていく、といった方法論が観察された。この際、受講生への傾聴をするコーディネーターがまちの中から有志で募られ⁷、コーディネーター同士の連携やコーディネーターと受講生の連携も進み、互いを支援しあう人的ネットワークがその行為を包括的に支えていると言える。

岡本^[8]は、福祉施設での職員の主体性の発揮には「関係性の質」が重要なことを述べている。地域においても市民の主体的な力を発揮させていくには、個人が自己との対話を深めることと同時に、それを支える良い関係性（ネットワーク）が重要となる。

次に、

(2) 受講生に起きている効果

1) 「傾聴を通して自分という存在に目を向ける、自分との対話を通して自分を知る」

7 コーディネーターはぬま大学の卒業生であるOB・OGが担当することも多く、支援される側から支援する側へのある種の再生産が起きている点は注目すべき重要な点である。

ということについては、おおよそ7割の受講生が達成していると回答している。また、2)「他者を理解し他者との関係を作り何らかのアクションを起こす」ということについては、おおよそ7割の受講生が達成していると回答している。さらに、

3)「他者理解や関係創造を通し、より大きな地域やまちへのアクションを起こす」ということについては、おおよそ9割の受講生が達成していると回答している。

こうした結果を見ると、ほぼ受講生の7割～9割が、自分との対話－自分を知る、他者への理解や関係づくりへのスキルを得る、地域における具体的なアクションを起こすという行為を生み出していると言える。

(3) 地域への効果

1) 関係資本（人的ネットワーク）の構築

6. 研究結果における 10) 他者への理解や関係づくり では、

「誰かと一緒に何かアクションを起こせるようになった」が8名、次いで、「他人の夢や想いを聞き応援するようになった」が5名、「周りの人に自分の考えていることや感じていることを伝えるようになった」「他人の感情や思考を理解しようと思うようになった」が、それぞれに4名ずつであり、地域における他者との関係の在り方に影響を与えていることがわかる。

また、6. 9) ぬま大学で一番役に立ったことについては、「仲間ができた」が11名と最も多い。

さらに6. 10) 自分が変わったことでの周囲への影響、では、「地域内に新しいチャレ

ンジのネットワークができたことでチャレンジの連鎖が起きている」が8名で最も多い。こうした結果からは、ぬま大学は、地域の中のチャレンジを応援しあえる人的ネットワークの豊かさに貢献していると言えるだろう。

2) 地域における多様なアクション

第6期と第7期に関していえば、9割の受講生が具体的なアクションを生み出し継続している。このように、個人の地域における具体的なアクションが数多く地域に点在していくことが、地域における多様な問題に対応する力となっていくだろう。この点についても継続性についての評価が必要であり、こうした点についての経過観察は今後の課題である。

8. 本研究における今後の課題

本稿では、主に第6期と第7期の受講生を研究対象として考察を加えた（インタビューについては第1期から第8期が対象）。

気仙沼市でぬま大学が誕生したのは、2015年であり、2023年1月時点で第8期が終了している。今後は、第1期から第8期の中で立ち上がったマイブランの継続性や広がりを研究することが、研究課題として重要である。

9. おわりに

本稿では、若年人材の地域への主体的な参加を促す方法論と効果について考察を加えた。

筆者が最も注目した点は、その方法論であり、自己を確立することへの支援を、傾聴と人的ネットワークの多層的な関わりの中で成立させていく手法である。ヒアリングでは、「今までは集団の中の自己という見方しかさ

れる機会がなかったが、ぬま大学で初めて自分の話を最後まで聴いてもらえ、自分を大切にしようと思えた。」「やりたいという想いを肯定してもらえると、やってみようと思うようになる」といった内容が聞かれた。こうした点は、「個人の在り方、個人のやりたいこと」を引き出し応援していくことが地域活性化にもつながるという示唆と言えよう。

広井^[9]は、人口減少時代の意味を問う中で、「昭和の時代というものは急激な人口増加の中で日本人あるいは日本人社会が「集団で一本の道を登る時代」であったのではないか。それは良くも悪くも「一本の道」であるから、教育や人生のルートなどを含めて多様性といったことはあまり考慮されず、文字通り画一化が進み、それと並行していわゆる集団の「同調圧力」といったものも強固なものになっていった。そのような強力かつ一元的なベクトルから人々が「解放」され、いわば坂道を登った後の広いスペースで各人が自由な創造性を発揮していける、そうした時代がまさに人口減少社会ととらえられるのではないか。」と述べている。

戦後の私たちの社会（近代化）は集団主義や画一化が進む中（それは、地域独自の特徴を失いながら均一化する発展を遂げた地域の在り方とも類似するのだが⁸⁾）、自己の確立や個人の在り方を明確に問われる機会が社会の中で薄かった時代とは言えまいか。今、人口減少時代を迎え、大きな経済による地域経済の牽引が難しい時代の地域活性化とは、私

たち個人一人一人が生き方を確立しながら、創造性を発揮することこそが重要なのではないだろうか。現代における地域活性化に必要な視点として、「私たち一人一人が自らと対話をし生き方、在り方を確立しながら、創造性を発揮すること」を提案してみたい。

謝辞

この度の研究では、気仙沼市役所の担当課の方々、ぬま大学を企画運営している合同会社colareの職員の方々、ぬま大学卒業生の方々にインタビューやアンケートなどで多大なるご協力をいただきましたことを、ここに感謝申し上げます。

参考文献

- [1] 枝廣淳子 (2018)『地元経済を創りなおす』, 岩波新書, p. i
- [2] 大友和佳子 (2021)「地域における「若年移住者」の新しい取組みと支援に関する研究－地域起業（ローカルベンチャー）と中間支援組織の視点から－」, 共済総合研究Vol.82
- [3] 河井孝仁 (2018)「地域参画総量が地域を生き残らせる－「関係人口」を超えて」『ガバナンス』, p. 27
- [4] 古市勝也・ブストス・ナサリオ (2014)「地域課題解決のための人材育成プログラムの開発と実際に関する研究」, 九州共立大学紀要 第4巻 第2号, p. 12
- [5] Sherry R. Arnstein: A Ladder Of Citizen Participation, Journal of the American Planning Association., 216－224, 1969.
- [6] 大友和佳子 (2022)「地方創生における人材育成プログラムの魅力ある展開－宮城県気仙沼市にみる世代・分野をまたぐ多彩な試み」, 共済総研レポートNo.181
- [7] ダニエル・ゴールマン, ピーター・センゲ著, 井上英之監訳 (2022)『21世紀の教育』, ダイアモンド社, pp.19－21
- [8] 岡本晴美 (2017)「社会福祉施設における人材育成－職員に求められる「主体性」とその形成・発揮を支援する職場－」, 評論・社会科学, p. 100
- [9] 広井良典 (2019)『人口減少社会のデザイン』, 東洋経済新報社, p. 43
- [10] 島村菜津 (2013)『スローシティ 世界の均質化と闘うイタリアの小さな町』, 光文社新書, p. 15

8 島村^[10]は『スローシティ 世界の均質化と闘うイタリアの小さな町』で、「日本を覆っていく閉塞感の一つに、私は生活空間の均質化というものがあるように思う。郊外型の巨大なショッピングモール、世界中同じような映画ばかり上映するシネコン、画一的な住宅街、駅前や国道沿いに並ぶチェーン店。だが、私たちにこの世界の均一化から逃れるすべがあるのだろうか。グローバル化社会の中で、人々が幸福にくらす場とは何なのか。」ということを問うている。